

(一一)

「恨むなよ、彼の兎を！」

彼もまた 罪を悔ひ、

今は美しき 波に乗つて、

海原を飛ぶよ、走るよ。」

(一二)

「あら樂しげに今宵は、

三五夜中 月滿てり。

二千里外の 秋も冴えて、

仇雲は散るよ、消ゆるよ。」

(一三)

「いざや囃せ 秋の調！」

いざ唱へや 秋の歌！

乾かば露に 咽喉を濕して、

夜もすがら 唄へ囃せや！」

(一四)

「あら樂し 此望の夜！」

我も此所に 留まらん。

さらば美しき 露の玉よ、

我が前に舞へよ 光れよ！」

ト、謠ひながら段々近く進みよる。

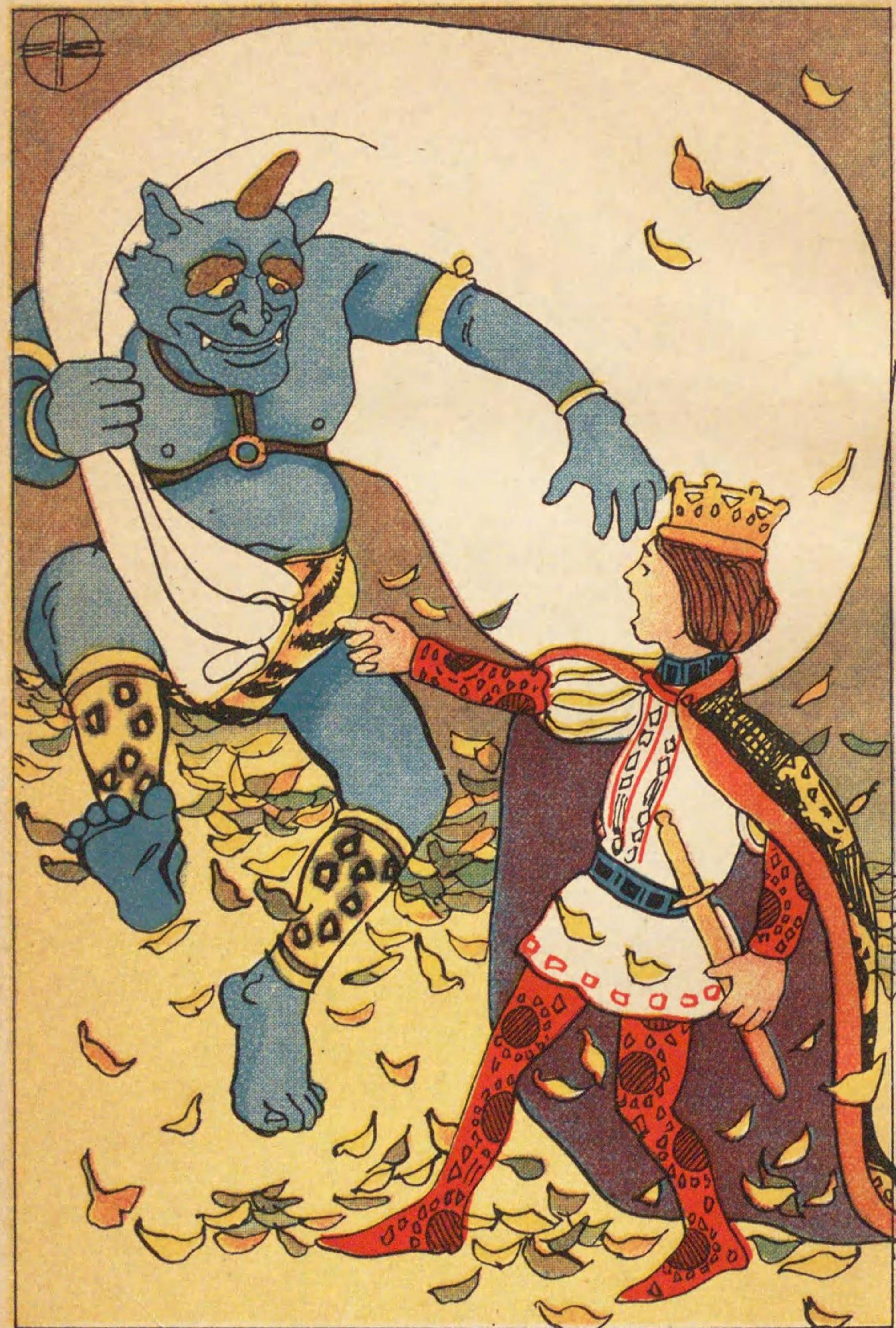
是にて蟲一同、また以前の曲を奏し、それにつれて白玉ま



お伽歌劇
すく光りつゝ舞ひ狂ふ。

(二八〇)

(をはり)



お伽歌劇
すく光りつ、舞ひ狂ふ。

(をほり)

冬落葉の宮

場割

上社頭の時雨
下殿上の木枯

登場人物

一太郎 松 十四五の少年

一風 後に葉守王

風袋を持つ

一銀杏の精

其の子

一小銀杏の精

冬落葉の宮

一梅の葉の精
一櫻の葉の精
一桃の葉の精
一槭の葉の精
一柿の葉の精
一栗の葉の精

上 社頭の時雨

本舞臺正面古き神社の拜殿。階段の前には賽銭箱、少し離れて對の駒犬、石燈籠など配置し。上手少し前へ寄せて、大な洞のある銀杏一本、神木の心にて注連繩を張る。社の後上下共、一面杉、檜などの立木よろしく、凡て落葉の宮の拜殿の體。此所に孤兒太郎松、順禮の姿にて立ち掛り居る。此模様凄き風の音にて幕明く。

太郎松石疊の上に立ちて唄ふ。

孤兒の歌

(一)

『空飛ぶ鳥に 埒あり、』

されど我には、家も無し。

道行く犬に 毛皮あり、

されど我には 衣も無し。

その家も 建てなば建ちなん。

その衣も 織りなば織れなん。

されど、されど、あゝされど、

我には父無し、

冬 落葉の宮

あゝ母も！』

(一一)

『父なき我に 命あり、

されど淋しき 日を送る。

母無き我に 力あり、

されど苦しき 世を辿る。

あゝ父よ 呼べども答へず。

あゝ母よ 追へども届かず。

いかに いかに、あゝいかに

力も盡きたり、

あゝ 命！』

ト、さも哀れなる調子にて唄ひ、如何にも疲れたる體にて、
路傍の石に腰をかける。

此時風の音劇しく、ハラ／＼と時雨を降らす。太郎松身震

ひしながら、

太郎松『あゝ寒や この風は！

雪おろす 山の風！

身に染みて 骨までも、

錐をもて 刺さるゝか？

鋸をもて 挽かるゝか？

さなきだに 薄き衣

その衣も 襤褸一重。

冬 落葉の宮

雨に打たれ 露に朽ち、
風にいま 手切らるゝ。

あはれく 木々の葉の、
梢放れて 地に落つる。

来よやく その間に
来て我を 掩ひてよ！』

ト、云ふ中、また風はげしく吹き、砂などまき上げて、物
凄き景色と成る。

太郎松は笠を取られまいと、その縁に手をかけ、身を縮め
て拜殿に近づき、階段に腰をかけ、又空を見あげて、

(太郎松)あゝ、あの雲は切れて居る、この雨も直き止むだらう。

今朝からろくに物も食はず、方々歩行廻つたから、何だか大
變草臥れた。幸ひ御宮に人も居ず、誰も叱りに來はしまいか
ら、まづ御拜を済ましてから、暫く此所で休むとしよう。

ト、負笈を卸して身を軽くし、改めて神前に拜して、再び
元の坐に着き、落葉の風に舞ふを見ながら、

太郎松『春の花見 夏の納涼、

秋はまた 紅葉見に、

此の宮の 賑ひは、

縁日や お祭の、

その日にも 限らぬに、

さりとは 冬の來て、

冬 落葉の宮

人は來ぬ この御宮。

音するは 風さそふ、

木々の葉の 舞ふ斗り。』

『舞ふはく 木々の木葉！

木葉もと 生なきも、

風に氣を 入れられて、

宙に飛び 地に踊り、

休むかと 見ればまた、

つと立ちて 走りゆく。

丸き葉は 誰の笠？

長き葉は 誰の袖？

その舞の 面白や！』

『思へむかし 人のはじめ、

衣も無き その頃は、

木葉もて 身をまとひ、

雨に耐へ 日を忍び、

冬をさへ 知らざりき。

げに清き 木葉衣！

なまじ着る この襪褌の、

破れ衣に 優すらんに、

など織らぬ 木葉衣？』

『やよや木葉 心あらば、

冬 落葉の宮

我が爲めに 衣織りて、

この襪褌に 代へよかし。

空に舞ひ 地に踊る、

其も我に 興あれど、

凍えたる 我が身には、

樂しみの 氣も疲れ、

なぐさみの 目もくらむ。

あら曲も 無や木葉！』

ト、太郎松は段々疲勞に堪へぬ體にて、遂に階段に横はり、目を閉ぢて身動きもせず、漸く寢入りたる體。折から又風吹きすすみ、時雨ハラ〜と來る。

落葉の歌

合唱

(一)

『サラ〜〜〜 サラリ サラ！

さツと吹き來る 風の手、

さそひ出されて 梢をば、

さらば〜と 暇乞ひ、

わが行く方や 如何ならん？』

(二)

『サラ〜〜〜 サラリ サラ！

さても悲しや 春雨や、

冬 落葉の宮

五月雨頃を

青々と、

さかり榮えし

木々の葉も、

いまこそ落つれ

この風に。』

(三)

『サラ／＼／＼／＼』

サラリ サラ！

さすが別れの

惜まれて、

さりし梢を

見返れば、

さだかにそれと

見えぬまで、

枝も動くよ

風の手に。』

(四)

『サラ／＼／＼／＼』

サラリ サラ！

さきがけ急ぐ

梅の葉や、

櫻も桃も

皆ちれば、

さらに木葉を

止めあへぬ、

枝、凧に

泣き叫ぶ。』

ト、此歌の間に、梅、櫻、桃を初め、槭、榎、柿、栗など

の葉の精、上手下手より舞ひながら現はれ、拜殿の前の石

畳の上にて、皆々手をつなぎ合ひ、右の歌を唄ひながら、

輪に成つて踊る。

此時又風が来て、木葉の精を強く吹くと、皆之に驚かさ

て、半分は拜殿の椽の上、半分はその椽の下へ逃げ込む。

此邊可笑味の振あるべし。

(梅の葉)ヤレ、恐い事だつた。もう少して狛犬と鉢合せをして、あぶなく葉尖を折られる所。

(櫻の葉)狛犬と鉢合せをする位ならよいが、私は遠く吹き飛ばされて、手水鉢の中へ投げ込まれる所を、やつと此方へ反れたのだ。

(桃の葉)それより私はもう少しで、賽銭箱へ落ちる所さ。あんな所へ入れられて見なさい、二度と皆に會へやしないや。

ト、椽の上で云へば、下からは槭、柿、栗が這ひ出て、

(栗の葉)イヤあぶなかつたく。今の風でつむじに廻はされ、ほんとに目が眩んでしまった。

(柿の葉)乃公はまた地を引摺られて、こんなに泥だらけにされち

やつたぜ。

(栗の葉)それよりは乃公なんぞは、小砂利を散々打ちつけられて、こんなに傷をつけられた。

ト、皆々顔を見合はせ、

(梅の葉)だが、まア一枚も迷兒に成らず、これが何より結構だ。

ト、互ひに無事を喜ぶ。その中、槭の葉は太郎松を見つけ、(槭の葉)やア、こんな所に妙な奴が居るぜ。

(櫻の葉)オ、こりやア人間だ。

(柿の葉)だがこりやア乞食だぜ。

(桃の葉)乞食ぢやア無い順禮だ。

(栗の葉)何にしても襪褌を着た、汚らしい小僧ぢやア無いか。

(桃の葉)側へ寄るとよごれるぜ。

(柿の葉)此方へ退いてろく！

(櫻の葉)だがこんな汚い風俗で、この神様の御宮に寝るとは、太

い奴だ。

(槭の葉)かまはないから引摺おろせ！

(梅の葉)さア、みんな手を貸せ、手を貸せ！

ト、一同立ち掛り、太郎松を引立てやうとする。

途端に高く聲あつて、

『ヤレ待て 木の葉！』

この子は よい子！

よい子寝たとて 木の葉ども、

夢をさますな 驚かすな！』

ト、云ふので皆々は、驚いて上を見あげると、神木の梢か

ら、銀杏の葉一枚、ヒラ／＼と舞ひ下つて来る。

(梅の葉)オ、誰かと思へば銀杏さん！ 今止めたのはお前さん

かエ？

ト云ふ。銀杏は大様に階段を上つて、正面に立ちながら、

神木の歌

(一)

『ヤオレよく聞け！』

冬 落葉の宮

我が友 木の葉

春に芽出して

夏をば 榮え、

秋に錦を 飾りし我等、

冬の眠の 一度び覺めて、

霜の牙、雪の爪！

凧の手の 恐ろしく、

我等が梢 襲ふ時、

あゝ我梢 襲ふ時！』

(二)

『アハレこれ見よ！

我が友 木の葉！

山に、時雨の

礫と 降れば、

枝に溜らず、散り飛ぶ我等。

色は衰へ 水氣も枯れて、

路の隈、谷の底！

旅人の足 酷らしく

我等が上を 躡る時、

あゝ我が上を 躡る時！』

(三)

『さらに思へや！

冬 落葉の宮

我が友 木の葉!

川に氷の

硝子と 張れば、

散りて流れず 凍て付く我等。

揺れど悶けど 力も 盡きて、

橋の下 岸の陰!

船頭の棹 荒らかに

我等が邊 叩く時、

あゝ我が邊 叩く時!』

(四)

『兎にも角にも

我が友 木の葉!

弱きこの身の

冬にし 會へば、

枯れて破れて 朽ちゆく我等。

土に塗みれつ 芥に交り、

焼けば灰 掃けば塵!

一陣の風 来るほどに

我等が行方 そも何所、

あゝ我が行方 そも何所?』

(五)

『さるに聞かずや

冬 落葉の宮

我が友 木の葉!

此所に可愛の

人の子 ありて、

我等 木の葉を 頼める言葉。

寒さ得耐へず 眠に入れば

身にや着る 錦綾?

神前の夢 温かに

我等が情 惚ぶらん、

あゝ我が情 惚ぶらん。』

(六)

『いざやいざ立て!』

我が友 木の葉!

とても朽つべき

この身を 舉げて、

可愛い此子を 飾らば如何に!

よしや眠の 束の間なりと、

錦 身に、玉を 手に!

夢慰の榮華 樂しくも

我等が徳を 歌はせん、

あゝ我が徳を 歌はせん!』

と朗かに歌ふ。歌の間、他の木葉共は感心して聞いて居る。

(梅) イヤ、銀杏さんは神木だけに、流石目の着け所が違ふ。

(櫻) 何を云つても年の功、幹に注連の張つたる木は、何うしても見識があるワ。

(桃) いかにもこの順禮の子は、薄汚れた縊縷一枚、この寒さにやア耐へられまいに。

(槭) 此方等木の葉をかき集めて、焚火せうとは思ひもせず、

(柿) それより木の葉を綴り合はせて、木の葉衣が着て見たいとは、ほんとに可憐らしい子ぢやア無いか。

(栗) 而も此子は此間、私等の枝に果のあるを見て、さも欲しさに眺めて居たが、石を投げたり竿で打つたり、悪戯をして取るかと思へば、

(柿) 只大人しく下へ来て、落ちた果斗り拾うて居るは、他の子

供にや出来ない事だ。

ト、云ふ。これを聞いて銀杏も點頭きながら、

(銀杏) その事ならば私とても、疾うから感心して居た所ぢや。

お前方のは落ちたを拾へ、私の落とした果を見ては、手出しさへせなんだのぢや。これと云ふのも注連を見て、神木と知つたればこそ。これほど正直なこの子の上を、何で神様も守らずに置かれう。即ちその御神託を受けて、わざく參つたこの銀杏、是から皆の手を借りて、此子の衣を織らう程に、さア手傳ふたく。

(一同) オ、サ合點ぢや、合點ぢや!

是より銀杏の指揮に従ひ、木の葉共一同歌ひながら、代る

く木立の中に行き、手にく木の葉を持ち來りて、太郎
松の邊に踊りながら、その身に振り掛ける。

葉衣の歌

其一 梅の葉

『ヤンレ 着せましよ 梅衣。』

古い歌にも 唄はれて

梅の花笠 笠こそつくれ。

衣、織るのは 今日ばかり。

居たらさぞかし 鶯の

笑ひもせうに 今は冬。

ヤンレ着せましよ 梅衣！

梅の葉衣 着いさいな！』

其二 櫻の葉

『ヤンレ着せましよ 櫻衣！

花の若武者 花やかに

緘す小櫻、名にこそ残れ。

葉もて綴るは 今日ばかり。

居たらさぞかし 蝶々の

笑ひもせうに 今は冬。

ヤンレ着せましよ 櫻衣！』

櫻 葉衣 着いなさいな！』

冬 落葉の宮

其三 桃の葉

『ヤンレ着せましよ 桃襲！』

昔噺に 名も高き

桃の太郎は 果にこそ宿せ。

葉もて包むは 今日ばかり。

しかも命は 仙法の

千歳を三度び くり返へす。

ヤンレ着せましよ 桃襲！

桃の葉襲 着いさいな！』

其四 槭の葉

『ヤンレ着せましよ 槭染！』

霜に時雨に 染めくくて

綾に錦に 色こそまされ。

縹緲に代はるは 今日ばかり。

照れば夕日の あかくと、

燃えるに其身 焦がすまい。

ヤンレ着せましよ 楓染！

楓染衣 着いさいな！』

其五 柿の葉

『ヤンレ着せましよ 柿袴、

種は流石に 惜まれて、

道に棄ても 猿こそ拾へ。

冬 落葉の宮

この葉穿かすは 今日ばかり。

色も名に負ふ 柿紅葉、

澁い所が 一入ぞ。

ヤンレ着せましよ 柿袴！

柿の葉袴 着いさいな！』

其六 栗の葉

『ヤンレ着せましよ 栗羽織！

毬よ皮よと 疎まれて

三重に二重に 果をこそ包め。

人に着せるは 今日ばかり。

よしやこの葉の 薄くとも、

葉には毬無い 痛く無い。

ヤンレ着せましよ 栗羽織！

栗の羽織を 着いさいな！』

ト、此間に太郎松の體は、大方木の葉に埋まれてしまふ。

銀 杏

『頼もしや 我が友木の葉！

我が言葉 聞き入れて、

織り立てし 木の葉衣。

美しや この衣、木の葉！』

『げにそれよ 我が友木の葉！

この衣の 濫く

冬 落葉の宮

この夢の さめぬ間に、

いざさらば 此の夢の間に。」

『いで来たれ 我が友 木の葉！

この稚兒を 昇き行かん。

昇いていざ 我が宿へ！

とく行かん 我が宿、木の間！』

ト、歌ふ。一同はまた點頭いて、

『合點ぢや、合點ぢや！』

ト、三人宛左右に分れ、正體無き太郎松の體を擔ぎあげる。

銀杏その先に立ち、

銀杏

「眠れく わが稚子よ！

昇けよく 我が友等！

その子の夢の さめぬ程

昇けよ 靜に 心して！

眠れる人に 罪は無し、

罪無き人に 惠あり。

あゝ 今ぞ時！

冬の眠の 覺むる時、

人は眠の 榮に入らん。」

ト、歌ひながら、神木の洞の中に入る。續いて木の葉共、

靜かに太郎松を洞内へ擔ぎ込む。

(幕)

下 殿上の木枯

舞臺は一面立派なる宮殿。正面一壇高き所に、以前の太郎松、葉守の王の心にて、身に輝く斗りの綾錦を纏ひ、頭に金色の冠を頂き、悠然と坐を構へて居る。其傍には、銀杏の精、大臣と云ふ體にて、黄色の装束にて扣へ、それより少し離れて、梅の葉は緑、櫻の葉は櫻色、桃の葉は桃色、槭の葉は緋、柿の葉は柿色、栗の葉は焦茶色、各自前幕とは異り、立派な装束にて居並ぶ。

此模様優美なる音樂にて幕明くと、木の葉共一同、聲朗かに歌ふ。

葉守の歌

其一 梅の葉

『そもや木の葉の 茂り合ふ、
その葉の陰に 立ち寄れば、
傘をまつ間の 雨宿り。
誰か木の葉に 謝せざらん。』

合唱

『さるを冬てふ いたづら者の
來ては 木の葉をかきむしる。
あはれ葉守の 御ん君！』

冬 落葉の宮

守まもらせたまへ 木き々の葉はを！

其二 櫻さくらの葉は

『さても木の葉はの 茂しげり合あふ

その葉はの陰かげに 立たちよれば、

汗あせを忘わするゝ 涼すずしさに、

誰たれか葉風はかせを 褒ほめざらん。』

合がっ唱しやう (同前)

其三 桃ももの葉は

『されば木の葉はの 茂しげり合あふ、

その葉はの緑みどりり 見渡みわたせば、

書ふみに疲つかれし 人ひとの目めの、

何などて葉色はいろに 癒いえざらん。』

合がっ唱しやう (同前)

其四 槭もみぢの葉は

『または木の葉はの 色いろづける、

その葉はの錦にしき 見渡みわたせば、

人ひとの巧たくみも 及およばざる、

神かみやこの世よを 飾かざるらん。』

合がっ唱しやう (同前)

其五 柿かきの葉は

『こゝに木この葉はの めで度たさは、

その葉はの効験きけん あらたかに

冬 落葉はの宮

風呂に沸せば 湯浴する

人の病は 去りぬらん。』

合唱 (同前)

其六 栗の葉

『ことに木の葉の 綴り合ふ

木の葉衣の 美しさ。

錦も綾も その前に

その目閉さいで 逃げやせん。』

合唱 (同前)

歌切れると、銀杏進み出で、太郎松の葉守王に向ひ、

銀杏

『あはれ惠深き 我が君！

此度 我等木葉共の、

君を迎へ 奉りて、

木の葉の國を 知ろしめす、

葉守の君と 崇めまつるは、

もと我が願に 御座りまする。』

『さるに心寛き 我が君！

先に 我等木葉共の、

無禮を咎め 給はずして、

我等が願 聴こしめし、

葉守の君と 成らせ給ふは、

冬 落葉の宮

我等の喜悅 何か及ばん。』

『されば幸ぞ多き 我が君！

己に 我等木葉共の、

命 守らせ給ふからは、

我等が榮 千代八千代

葉守の君に 断えずあやかり、

我等が葉色の など移はん。』

『いでや 譽高き 我が君！

今ぞ 我等木葉共の、

君が威徳を 稱へんため、

我等が力 ある限り、

葉守の樂を 此處に奏せん。
我等が舞の手 見そなはせや！』

葉守の王

(一)

『あな嬉し、木葉共！

我を君に 崇むとて、

我を想む 樂や奏す？

げに思へば、

我に葉守の力無くも、

樂に葉守の 驗あらん。』

冬 落葉の宮

(二)

『いざあらば 木葉共！』

歌へ囃せ 葉守るてふ、

樂は芽出度き 例ぞかし。

たゞ思へば、

我に葉守の 誓あるも、

風に落葉の 恨あらん。』

(三)

『さて暫時 木葉共！』

樂を奏す その間に、

風の來らば 何とかする？

これ思へや、

風に落葉の 恨あらば、

我や葉守の 祈なさん。』

ト、坐を離れて天に向ひ、

葉守の祈

上の段

『天清淨 地清淨！』

その清淨の 天地の

間に氣ありて 風と云ふ。

此氣一たび 雲を出で、

冬 落葉の宮

春の神より 召されては、
木々の木芽を 誘ふなり。

此氣一たび 山を出て、

夏の神にも 召さるれば、

人に暑さを 拂ふなり。

此氣一たび 野を出で、

秋の神にも 召さるれば、

月に雲をも 拂ふなり。』

中の段

『天清淨 地清淨！

その清淨の 天地の、

間に魔ありて 冬と云ふ。

この魔一たび 目を覺まし、

北の扉を 出づる時、

天地忽ち 寂なり。

この魔一たび 身を起こし、

凄き眼に 睨む時、

野山淋しく 嘆つなり。

この魔一たび 歩を運び、

寒き腕を 振ふ時、

艸木苦しく 叫ぶなり。』

下の段

冬 落葉の宮

『天清淨 地清淨！』

この清淨の間にある、

あはれ優しき風の神！

春は木の芽に喜ばれ、

夏は人にも慕はれて、

秋は月にも頼まるゝ。

さるに一たび冬の魔の、

手に魅せられて立つ時は、

梢を荒らし葉を飛ばし。

木々の恨を招くなり、

その愚を知れや風の神！

その愚を知れや風の神！』

(銀杏) なんと方々！流石葉守の君だけあつて、この御思慮は又

格別。葉守の舞を始める前に、まづ風の神を祈り静めて、我

我を吹かせぬ様にして下さる、難有い事では御坐らぬか。

(梅) 如何にもかうして祈られ、ば、なんぼ風の神だつて、もう

吹いては來られまい。

(櫻) 元より御祈にもある通り、風に科は無いのだが、冬の魔と

云ふ悪い神に、云は、お先に使はれ、ばこそ、

(桃) あゝして野山を吹き荒らし、木の葉を吹いては散らすのだ。

(槭) 然し今の御祈で、風の神も得心が行けば、

(柿) もう木の葉は吹かぬ故、我々共は大安心！

(栗) それと云ふのも葉守様のお蔭、なんと是から葉守様の、萬歳を皆で唱へやうぢやないか。

(銀) そりやよい所へ氣が付いた、では私が音頭を取るぞ。

葉守王殿下萬歳!

(一同) 萬歳

ト、一同立つて萬歳を唱へる。

此所へ下手より、小銀杏の葉一枚、ヒラ／＼と走つて来て、舞臺で三廻りほど旋轉を舞ひながら、バツタリと平伏し、

(小銀杏) ヤレ／＼酷い目に會た。苦しや／＼!

(銀杏) オ、誰かと思へば我子小銀杏! 慌しい何とした?

(小銀杏) オ、阿父様! 聞いて下だされ! 今梢に残つて居た

ら、恐ろしい風が来て、私を取つて地に投げつけ、そのまゝ池へ追ひ落される所を、やつとの事で逃げて來ました。あゝ恐ろしや、／＼! 今にもあの風が、此所へ荒れ込んで來やうなら、お前達も皆ちり／＼、何所へ吹き飛ばされるか知れない。皆さん油斷は成りませんぞ。

ト、云ふに、皆々顔見合はせて、

(梅) なんとそれでは風が、お前を枝から吹き落としたか?

(櫻) シテその風は、まだ其邊に吹いて居るのか?

(小銀杏) 何して急に吹き止むものか。アレ彼通りヒュー／＼と、聲が聞えて居るではないか。

(桃) なる程聞けば聞える様だが、餘程これは強い奴ぢやナ。

(械) ぢやがまさか此所までは、なんぼ強くても吹き込めまい。

(小銀杏) 私わたしの逃にげて入はいつて來きたのを、矢張やっばり見みて居ゐた様やうだから。

(柿) それではお前まへの後あとを追おうて、

(小銀杏) 今いまに來くるかも知しれぬのぢや。

(栗) やアそれは大變たいへんだ。ア、何どうせうく？

ト、皆々みなくうろた狼狽たへる。

銀杏ぎんなんも當惑たうわくの色いろにて、下手しもてを見込みみながら、

(銀杏) 折角せつかく葉守はもりの君きみを得えて、木この葉はの無事ぶじを喜よろこんだに、まだそ

の舞まひも始はじめぬ中うちから、風かぜの神かみに搔かき散ちらされるか。ハテ忌々いまく

しい事ことぢやなア。

ト、思入おもいりあつて、きつと心こころづき、また我子わがこ小銀杏いんぎようを見みて、

(銀杏) ウン、それと云いふもこの小葉奴こはめが、なまじ未練みれんで凧こがらしを逃に

げ、此所こへ隠かくれ込んだりやこそ、我々われども共ともの所在ありかも知しらるれ。

『思おもへば 憎にくい この小銀杏こいんぎよう。』

大だいの虫むしの 爲ためならば、

小せうの虫むしは 命いのちも棄すつ。

今いまぞ葉守はもりのこの宮みやは、

我わが兒こに替かへる場合あひで無ない。

大義たいぎは親しんを滅めつすと云いふ。

よしこの宮みやの平和へいわの爲ために、

我わが兒こを追おはん、凧こがらしに、

我わが兒こを吳くれん、凧こがらしに！』

ト、云ひながら荒々しく、小銀杏の襟頭を取つて、下手の方へ投げやうとする、太郎松急いでそれを制し、

(太郎松)『うろたへな親銀杏！』

驚くなヤヨ小銀杏！

よし風の吹き込むとも、

此所は葉守の宮なるぞ。

我は葉守の君なるぞ。

来たれいざ 風、

汝に葉を打つ力あらば、

我に葉を守る誓あり。

取つて組まん 風と、

組んで伏せん 風を。

見よや 葉守の

わが力 見よや！』

ト、凛々しく立ちあがる。

此時ヒュー／＼ゴウ／＼と云ふ音劇しく、下手より風の神、左の肩に風袋を負ひ、右の手を打ち振り／＼、荒々しく走つて出る。木の葉共は此體に肝を消し、皆隅々へ伏してしまふ。その間に風の神ツカ／＼と進んで、直ぐ擅上に昇らうとするのを、太郎松右手の笏を振りあげ、エイと一打ち喰はす。風の神少しひるんで、また突き掛る所を、太郎松ハツタと睨めつけ、

太郎松

『すされ 凧！』

愚や、風の神！

今我が祈 何とか聞ける？

冬の魔に 煽動られ、

木々の葉を 悩ますは、

清浄の 天地を汚がし、

平穩の 世界を亂だす。

その罪 幾何そ！

その罰 思はずや！

すされ 凧！

風の神これを聞くと、二三歩退つて正面に向き直り、大聲に笑ひ出す。

風の神

『愚や 風の神！』

『ヒュー、アハ、、！』

ヒュー、アハ、、！

愚とは 誰の事？

葉守るてふ汝こそ、

その愚 底知れず。

笑へ、笑へ！

ヒュー、アハ、、！

笑へ、笑へ！

ヒユー、アハ、、！』

太郎松

『黙れ 凧！』

騒がし 風の神！

今我が事を 何とか云へる？

愚とや 誰おるか？

底知れず とは何ぞ？

葉を守る 誓を立て、

風止むる 祈を込めし、

一念 岩を徹す

その徳 思はずや？

黙れ 凧！

騒がし 風の神！』

風の神

『ヒユー、アハ、、！

ヒユー、アハ、、！

一念の 徹す岩、

その岩も 我が前に、

動かさば 揺らぐべし。

笑へ 笑へ！

ヒユー、アハ、、！

笑へ、笑へ！

ヒューーアハ、ハ！』

太郎松

『何をか笑ふ 風の神？』

笑ふは福の 神と聞け、

世に禍を 吹きまはる、

風に笑ひの あるべきか？』

風の神

『知らずや風も 吹くからに

世を賑はしの 福の神。

それを禍と 云へばこそ

人を愚と 笑ふなれ。』

太郎松

『世を賑はすと 云ひながら！

など木々の葉を 吹き落す、

世に淋しさを 嘆かする？

さても忌はし 風の神！』

風の神

『古葉落すは 來ん春に

また美はしき 若葉もて、

木々を飾らん 爲めなるを、

何を古葉の まよひ言！』

太郎松

「何とてさらば 松杉の

その葉もともに 落さざる?

これに優しく、 かれに憂き

片手落葉を 吹くな風!」

風の神

「吹くに松、杉、梅、槭

何依怙あらん。 只木々の

葉に強弱の あればこそ、

常盤 枯葉の 差別あれ。」

太郎松

「その道理も 読み得たり。

されど只さへ 弱き葉の、

辛くも枝に 縋れるを、

何しに來ては 吹き落す?」

風の神

「落とすは風の 科ならず、

まことは冬の 力ぞや。

されど知らずや この冬の、

あればぞ春の 榮ゆるを。」

太郎松

「アラ面白や 冬ありて、

冬 落葉の宮

初めて春の榮ありと、

聞けば眞に道理や！

我れ誤れり、風の神！』

風の神

『さてもやさしや 葉守君！

我も葉守の 風なれば、

古葉散らして 來ん春を、

若葉飾らん 美しく。』

太郎松

『アラ頼もしの 言の葉や！

我も葉守の 甲斐ありて、

古葉に代はる 若葉より

よき言の葉を 聞き得たり。』

ト、太郎松嬉しき思入にて、

(太郎松)『さらばよ 風の神！

我は 汝の友たらん！』

(風の神)『我も汝の友たらん！

さらばよ 葉守君！』

ト、是にて互ひに握手する。

伏したる木葉共は、先刻からの問答を聞き、初めて迷の解

けし心にて、此時一齊に起ち上り、太郎松、風の神を壇上

に直らせ、その前に立ち列びながら、

落葉の歌

(一)

「赤、緑

黄に、紫に、茶に染みて、
木々を飾りし、その果を、

今ぞ葉守りの 風の手に、

誘はれて、誘はれて、

露は玉と 碎けなん。

我は錦と、散りて飛ばなん。』

(二)

「綾、錦

野に、山の端に、織りなせし

秋の飾りは 冬枯の

土に還へるも その枝の

やがて見よ やがて見よ、

春は花と榮へなん。

我はその春 待ちて眠らん。』

(三)

「いでさらば

吹け凧よ！ とく吹きて、

こゝに名残りの 葉を舞はせ

冬 落葉の宮

落葉の宮を賑はせよ!

いざ舞はん いざ舞はん!

風は宮を守らなん。

我はその風を受けて舞はなん。』

ト、一同楽しく歌ひ、美しく舞ふ。

(幕)

お伽歌劇終

録附 お伽唱歌

(1) 森の姥さん

一 日はあたたかに 風は無く

今日はほんとに よい天気。

『兄さま一しよに 行きましょよ

いつもの森へ 花つみに。』

二 みよ子が云へば 三郎も

『そんなら行かう みよちゃん。』と

共に手かごを さげながら

森のかたへと さして行く。

三

行けば松杉 生ひしげり、

すみれ たんぽぽ さきみだれ、

小鳥もなけば 蝶も飛ぶ、

春はたのしい 森の中。

四

花つみながら 余念なく、

あそぶ折から 目の前へ、

ふいに一疋 飛び出たは、

見るもあはれな 兎の子。

五

耳の尖から 足の尖

背も頭も 泥だらけ。

息もせわしく かけ寄つて、

さも苦しげに 横たはる。

六

見るより兄の 三郎は

持った杖をば 振りあげて、

『おのれ汚い 野良兎！』

そこ退け退け！』と 追ひたてる。

七

みよ子はいそぎ ひきとめて、

『兄さんまつて 下ださいよ。』

たとひ汚い 獣とて

私たちには 何もせぬ。

八

まして兎は うさぎ あの通り

ひどく疲れて つか 居る様な。

いつそ助けて たす やりましょ。』と

云ひつゝ寄ツて よ 抱きあげる。

九

云はれて兄も あに もつともと、

おのが辨當 べんたう わけてやり、

やがて邊りの ほと 小流れに

泥をも洗ひ、 どろ ふき落とす。

十

洗へば元の あら 白兎、

雪かとおもふ ゆき うつくしさ。

長い耳をば なが 振り立てて、

十一

そのまた跡を あと 兄妹が

したうふて行けば ゆ いつの間に。

来たとも知れず き 一つ家の

中には白髪 なか のお婆さん。

十二

『これはお二人 ふたり よくお出で。

先から待て まっ 居りました。

さア〜此方へ こち お通り!』と

十三

迎へ取られて むか 二人が

家へ上れば、 うち 忽ちに

運び出された はこ 御馳走は

十四

どれもおいしい物ばかり。
十分たべて 歸らうと
すればお宿へ お土産と、
奥から又も 運び出す

山の様なる 寶物。

十五

そこへ先刻の 小兎が
仲間大ぜい 連れて来て、
てんでに寶 肩に負ひ、

二人について お供する。

十六

わが家に急ぐ 兄妹は
ふりむきながら 幾度か、
『森の姥さん ありがとよ！』
『森の姥さん ありがとよ！』

(2) 木舟 石舟

一

青い疊を見る やうな
海の面を 面白や、
さても大きな 龜の背に

可愛い稚子の 乗て行く。

二

太郎 次郎の 二人は、
濱に居ながら これを見て、

オーイオーいと 聲高く、

呼べは其子も 此方向く。

三

『お前は 何所の 誰の子だ？』
お伽唱歌

『おれは 浦島太郎の子。』

今また 龜に 乗せられて

龍宮城へ 行く所。』

四 『ナニ 龍宮へ遊びにか？』

そんなら 僕も 行き度いな。』

『何卒 私も 一所に！』と

二人は 切りに 頼み込む。

五 浦島の子は 考へて、

『ほんとに 連れて 行き度いが、

生憎 龜は 只一つ、

とても三人 乗られまい。』

六 龜は 下から 口出して、

『案じなさんな 二人には、

私が舟を 貸ませう。』

それで後から 入らつしやい！』

七 云ふ間もあらず 磯端に、

浮び出でたる 舟見れば、

一つは木舟、常の舟、

一つは石の 變り舟。

八 太郎は 木舟 見る よりも、

すばやく乗つて 漕ぎ出だす。

あとに 石舟 のこされて、

九

次郎はスゴスゴこれに乗る。

木舟を漕げば 譯も無く、

はや沖合へ出る 太郎。

石舟 押せど 重たさに、

浮きつ沈みつ する次郎。

十

太郎は やがて つけ上り、

櫓を投げすてて 船底に、

コロリと 成れば『ア、樂や！

寝ながら行かう 龍宮へ。』

十一

次郎はそれに 引かへて、

重い石舟 動かすに、

十二

力の限り 根かぎり、

汗をしぼつて 權を取る。

此時見れば 不思議やな

今まで波も 無い海に、

白泡立てて 浮き出した、

大きな龜の 數知れず。

十三

眠る太郎の 舟みれば、

這ひ上つては 臥る龜の、

甲の重みで その舟も、

更に前へは 進まれません。

十四

石舟見れば 龜共の

お伽唱歌

右に左に とりついて、

エツシエツシと押すほどに、

矢を射る如く 進み行く。

十五

これに 次郎は 勇み立ち、

行けば忽ち 龜の背の

浦島の子に 連れられて、

龍宮城の 御客様。

十六

軽い木舟は その間に、

元の濱邊へ あともどり。

太郎は濱で 泣いて居る、

太郎は濱で 泣いて居る。

(3) くりくり坊主

一

秋の林に 育ちたる、

木の實 數ある その中に、

隣り合はせた 二個は、

栗の太郎に 柿之助。

二

栗の太郎は 棘だらけ、

針をならべた 頭髪。

つむじは何所に あるのやら、

意地も根性も ねじけ者。

三

それに 引かへ 柿之助、

お伽唱歌

見れば 圓顔 圓頭

つむじも 蒂も 中央に、

素直な質の やさ坊主。

四 栗の太郎の いたづらさ！

何科も無い 柿坊を、

ややともすれば 棘々の、

拳をあげて 打ちに来る。

五 果は 素直な 柿坊も、

腹に据ゑかね 山へ来て、

松の根方に 年を経た、

木菌太夫に 訴へる。

六 木菌太夫は これを聞き、

『そりや けしからん 栗太郎。

いでや 今後の 懲しめに、

柿の仇を 討つてやる。』

七 『何卒頼む』と 柿坊が

歸つたあとで 山中の

木菌残らず かりあつめ、

栗征伐の 布令を出す。

八 手に手に持った 松の葉は、

栗の棘にも 負けはせぬ、

これを鋭い 槍刀、

お伽唱歌

穂先揃へる 勢揃ひ。

九 「進め進め！」と 勇ましく、

押よせて来る 木菌共、

栗の太郎を 見るよりも、

「ソレ逃がすな！」と 征め掛る。

十 栗の太郎は 驚けど、

「高の知れたる 木菌共、

見れば 笠こそ 被つたれ、

どれも裸の やくざ武者！

十一 いで我が 針の 手並見よ！

棘の拳の味知れ！」と、

躍り掛つて 縦横に

暴れて 廻る栗太郎。

十二 されど木菌は 多勢なり、

栗は一個の かなしさは、

松葉の槍に チツチクチ！

松葉の剣に ツツクツツ！

十三 刺され 突かれて 栗太郎

流石の針の 刃も鈍り、

棘も弱れば、 其隙を

ねらつて掛る 木菌共。

十四 寄つてたかつて エイエイト、

お伽唱歌

力ちからまかせに その皮かはを、

むけば もろくも 皮かは剥はげて、

俄にはかに變かはる 栗くり太郎たろう。

十五 顔かはも 頭あたまも スル スルト、

奇き麗れいに なれば 今迄いままでの

心こころの針はりも 氣きの棘とげも、

取とれて 素直すなはな 栗くり太郎たろう！

十六 今日けふから 其名そのな 改あらためて

クリクリ坊主はうす 栗坊主くりはうす！

今は柿かきとも 仲なかよしの

クリクリ坊主はうす 栗坊主くりはうす！



力ちからまかせに、その皮かはを、

むけば、もろくも、皮かは剥はけて、

俄はなに變かはる、栗くり太郎たろう。

十五 顔かほも、頭かぶも、スル、スルと、

奇麗きれいに、なれば、今迄いままでの

心こころの針はりも、氣きの棘とげも、

取とれて、素直すなおな、栗くり太郎たろう！

十六 今日けふから、其名そのな、改あらためて

クリクリ坊主ばか、栗くり坊主ばか！

今は柿かきとも、仲なよしの

クリクリ坊主ばか、栗くり坊主ばか！



(4) うかれ木兎

一

ここに鎮守の森深く、

年経て茂る銀杏の、

その中ほどの三股に、

住むや木兎只一羽。

二

兎の様な耳を立て、

達磨の様な腹を出し、

ムクムク肥えて居る上に、

ギョロギョロ光る大目玉。

三

されど生憎くこの目玉、

お伽唱歌

夜は見えても 晝見えず、

あれは節穴 同然と、

鳥の仲間の 笑ひ物。

四

或る日根性の 悪鳥、

隣の藪へ 飛んで来て、

これも悪戯に 名を得たる、

いたづら雀 誘ひ出し、

五

『これから二羽で 森へ行き、

あの木兎の 明き盲、

思ふ存分 困らせて、

遊ばないか！』と 云ひ出せば。

六

『それは何より おもしろい、

お前は目玉 ついてやれ！

私は耳を 引張らう。』

『成る程これは上策。』と、

七

しめし合すを 初から、

側に隠れて 残りなく、

聞いて居たのは 藪陰の、

檜の梢の 葉一枚。

八

『さては雀や 鳥奴が、

木兎さんを いぢめるか、

よしそれならば 今の間に、

お伽唱歌

九

はやく知らせて やりたい。』と、
思ふ折から さつと吹く、
風に飛び乗り ヒラヒラヒラ!

はやくも飛んで 木兎の。

耳の邊りに 舞ひ下がり、

十

『これ木兎の 隠居さん!

お前いちめに 悪鳥、

いたづら雀 連れ立つて、

今に来るから、御用心!

十一

聞いて木兎 肝を消し、

『こりや大變!』と 逃げ出せば、

忽ち枝と 鉢合せ、

目から火の出る 其痛さ!

十二

『これさそんなに 慌てずに、

私の云ふ事 聞くがよい。

今に彼奴等 出て來たら、

わざと 斯うして かうして!』と、

十三

何やら耳に ささやけば、

やつとうなづく 木兎を、

尙親切に なぐさめて、

櫛の枯葉は 飛んで行く。

十四

いたづら雀 悪鳥、

お伽唱歌

さうとは知らず やつて来て、
耳を引いたり 目の玉を、

突かうとすれば こは如何に！

十五 『オ、鳥さん 雀さん！』

ようこそおいで 待つて居た。

さアさ一所に 躍らう。』と、

羽叩きしては 浮かれ出す。

十六

さてはやつぱり 目が利くか、

こいつは的が 外れたと、

鳥逃げ出す カアカアカア！

雀逃げ出す チウチウチウ！

(5) ウントコ爺さん

一 『ウントコ、くくく、ウントコナ！』

ウントコ、くくく、ウントコナ！』

ウントコ爺さん やつて来た、

ウントコ、くくく、云いながら。

二 『爺さん！ お前何だつて、

そんなにウントコ 云つてるの？』

『私の背中に ある瘤が、

重くて仕方が 無いからさ。』

三 『オヤ、お前の 背中にわ、

お伽唱歌

風呂敷包を 負つてると、

思つて居たらば 大違ひ。

それでわ大きな たん瘤か。

四 なるほどこいつわ 面白い。

ウントコ爺さん 背虫だネ。

ワイ／＼ワイ／＼ワイワイ！

笑つてやれ／＼ワイワイ！』

五 子供が笑えば、犬までが、

ワン／＼ワン／＼ 吠え立てる。

けれども爺さん 驚かず、

ニコ／＼笑つて 居る斗り。

六 ある時爺さん 殿様の、

御用で何所か お使いに、

行くとて出かける 時見れば、

背中に荷物を 負つて居る。

七 只さえ大きな たん瘤の、

乗つてる背中の その上に、

又もや大きな 荷を負つて、

いよく爺さん たまらない。

八 『ウントコ、／＼／＼、ウントコナ！

ウントコドツコイ、ドツコイナ！』

杖をば力に やつて行く。

九

額わダクく、汗だらけ。
見るよりいつもの子供達、
面白がつてわ、手を拍つて、
『爺さんたん瘤、また出来た、
一つで足りずに、又負つた。』

十

ウントコ爺さん、重たかる、
重けりや半分、置いといで！』
なんぞと散々、馬鹿にして、
ワイくワイく、付いて来る。

十一

けれども爺さん、荷を負つて、
行かうとする中、草臥れて、

十二

今でわウントコ、云う聲も、
だんく小さく、成つて行く。
此時太郎わ、かけよつて、
『モシく爺さん、待つといで！
お前わ大きな瘤持つて、
その上荷物わ、たまるまい。』

十三

何しろお前わ、年寄だ。
私が代つて、負つたげよう。』
『ドレぐ荷物、渡しなさい！』
太郎わ直さま、走りよる。

十四

爺さん、大そう喜んで、
お伽唱歌

『そんなら實に すまないが、

しばらくお前に 頼もう。』と、

云いつゝ荷物に 『ウントコサ！』

十五 おろして太郎にあてがえば、

太郎わそのまゝ 『ウントコサ！』

自分の背中に 負い込んで、

『そんなら爺さん 出かけよう。』

十六 爺さん太郎わ 連れ立つて、

山手の方えと いそぎゆく。

後の方でわ ワイくくと

なおさらみんなが 笑つてる。

十七 おかしい奴にわ 笑わせて、

ほどなく來かゝる 山の坂。

爺さん足をば ふみ外し、

南無三崖から 落込んだ。

十八 爺さん死なしちや ならないと、

太郎わ急いで その崖を、

下まで來て見りや こわ如何に、

爺さんたん瘤 破れちやつた。

十九 所が破れた たん瘤の、

中から金貨が わき出して、

此所にもキラく 光つてる。

其所にもピカ／＼ 光つてる。

二十 その時爺さん起き上り、

『私を助けた お禮にわ、

この金残らず あげるよ。』と、

云う間に姿わ 消え失せた。

二十一 あとにわ太郎が 喜んで、

そこらに散らかる 金貨をば、

一つにあつめて 『ウントコシヨ！

ウントコ、／＼／＼、ウントコシヨ！』

(6) ニコ／＼ 婆さん

一 ニコ／＼ 姿さん 好い婆さん、

いつでも ニコ／＼ 笑つてる。

嬉しい 時にわ なおの事、

かなしい 時でも 笑つてる。

二 『一体 お前わ 何だつて

そんなに ニコ／＼ して居るの？

たまにわ 怒つて ごらんな！』と、

云つても ニコ／＼ 笑つてる。

三 ある時 花ちゃん からかいに、

お伽歌劇附録
そうつと 廻つて 後から、
白髪を一本 引ぬいた。

けれども ニコく 笑つてる。

四

それから次にわ 太郎さんが、

せつかく お鍋に 煮ておいた、

お芋を のこらず 臺所え、

引くり かえして 逃げ出した。

五

それでも 怒らず 婆さんわ、

ニコく しながら 掃除して、

しんきに お芋を 煮直して、

煮えたら みんなに 食べさせた。

六

今度わ 次郎さん 出て行つて、

今朝から 洗つて 干しといた、

大切の 衣物に 溝泥を、

そこにも こゝにも 塗りつけて、

七

こうして おいたら 怒るだろ。

よし／＼ ほんとに 怒つたら、

水でも かけろと 手桶まで、

ないしよで 支度をして置いた。

八

所が やつぱり ニコくと、

笑つて 衣物を 取込んで、

も一度 洗濯 仕直して、

小言わ 少しも 云やしない。

九 これほど 悪戯 してやつて、

それでも 怒らぬ 婆さんめ、

今度わ 泣かせて やろうかと、

またもや 三人 相談し。

十 常から ほんとの 子の様に、

大切に 飼つてる 三毛猫の、

お玉を だまして 捉まえて、

いそいで 表え 連れ出した。

十一 お玉も これにわ 驚いて、

ブルく しながら 『お花さん！』

太郎さん！ 次郎さん！ 科もない、

私を 何うする つもりです？』

十二 云われて さすがの 三人も、

元より 悪氣の 無い子供、

『なるほど 此奴に 罪わ無い。』

いじめて やるのわ 亂暴だ。

十三 それより しばらく 婆さんの、

知らない 所に かくまつて。

それから 誑して やるがいつ。』

云いつ、 お玉を 縛りおき。

十四 三人 またもや 引かえし、

『オイく 婆さん 大變だ。』

大切のお玉が 死んぢやつた。

ヤレく 不憫や 氣の毒や!』

十五 云つても さわがぬ 婆さんわ、

『そんなら 死骸を 引取つて、

葬式 出さなきや 成りません。

全体 何方に 居るのです?』

十六 聞かれて 又もや 困つたが、

何でも 泣かせて やり度さに、

自分の 方から オイくと、

わざく 泣く眞似 して見せた。

十七 けれども 婆さん 首を振り、

『イヤく 泣いても あの猫が、

ほんとに 死んでる ものならば、

生まれて かえられる 者ぢやない。

十八 それより 泣いてる その手間で、

死骸を さがすが 一番』と、

急いで 門口 出かければ、

所え 歸つて 来たお玉、

十九 『ニヤアく ニヤンとも 御座いません。

私わ やつぱり この通り、

死なずに 達者で 居ります。』と、

二十

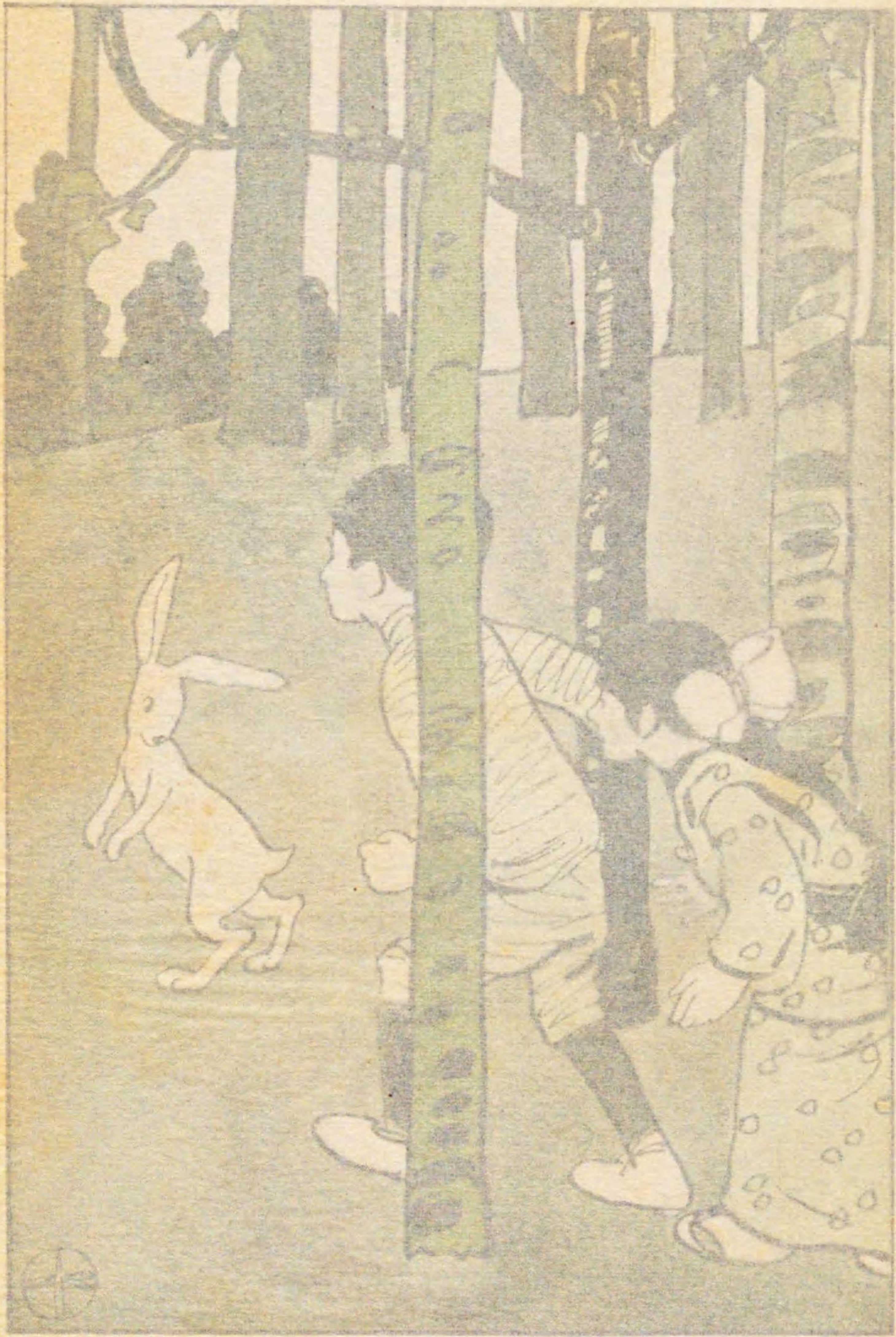
云いいつ、婆はあさんに飛とびついた。

太郎たろさん 次郎じろさん お花はなさん、

今更いまさら あやまる 外ほかわ無い。

婆はあさん やつぱり 笑わらつてる。

ニコく婆はあさん 好よい婆はあさん！。





云いつ、婆さんに飛びついた。

二十 太郎さん 次郎さん お花さん、

今更 あやまる 外わ無い。

婆さん やつぱり 笑つてる。

ニコく婆さん 好い婆さん！

(7) ウサく兔

一 ウサく兔が 躍つてる。

何見て兔が 躍つてる？

月見て兔が 躍つてる。

ピヨイくピヨイく 躍つてる。

二 所え狸が やつて来て、

『モシくうささん 兎さん！

お前も今夜わ お月見か？

私も仲間に入れとくれ！』

三 兎わ元より 長い耳、

お伽唱歌

はやくもその聲 聞きつけて、
誰かと思えば 狸さん、

お前も月見が したいのか？

したけりやするのも 可かろうが、

お前もお前で 友達が、

たくさん其方に あるだろう。

私わ此方で 別に見る。』

五 コレくゝ兎さん 何を云う？

かちくゝ山なら 知らぬ事、

今夜わごらんな あの通り、

月さえきれいに 晴れて居る。

六 まあるい月見る 私等が、

そんなに角ばる 事わ無い。

何でも一しよに 遊ぼう。』と、

狸わなかく 歸らない。

七 『そんなら勝手に するがい、

此方わかまわぬ 斗りだ。』と、

云いつゝ薄を かきわけて、

兎わ其場を 逃げ出した。

八 折から小猿が 來合せて、

『コレくゝ兎さん 何所え行く？

折角今夜の お月見に、

お伽唱歌

九

お前まえわ機嫌きげんが 悪いわるのか？』

イヤ／＼猿さるさん 聞きいとくれ！

機嫌きげんが悪わるくわ 無ないけれど、

狸たねきが仲間なかまえ 入はいろうと、

云いうのがいやさに 逃にげて來きた。』

十

『さりとわお前まえも へんくつな！

狸たねきの方ほうから あやまつて、

頼たのむと云いうなら 此方こつちでも、

仲間なかまに入いれたが いゝだろう。

十一

ドレ／＼私わたしも 行いこうから、

お前まえも一緒しよに 來きなさい！』と、

十二

小猿こざるわ兎うさぎを 説ときつけて、

もと居いた所ところえ 引ひきかえす。

此時このときふしぎや 草叢くさむらの、

中なかからしきりに 音おとがする。

『ポン／＼ポコリン、ポンポコリン！

ポン／＼ポコリン、ポンポコリン！』

十三

『猿さるさん あの音おと 何なんだろう？』

『あれこそ狸たねきの 腹はらつゝみ！』

『はじめて聞きいたが 面おも白しろい。

狸たねきわなか／＼ 藝げいがある。』

十四

『それ／＼見みなさい それだから、

仲間え入れても いゝだろう。』

『いゝともく、これからわ、

仲よく一緒に遊ぼう。』と、

十五

兎うさぎわ今更いまさら 嬉うれしさに、

小躍こおどりしながら やつて来て、

『狸たぬさん先刻さつきわ 御免ごめんよ!』と、

云いえば狸たぬきも 喜よろこんで、

十六

『そんなら仲間なかまに 入はいれるか、

ヤレく芽出度めでたいく。』と、

又またもや打うち出だす 腹鼓はらつづみ、

『ポンく、ポコリン、ポンポコリン!』

十七

はやせば此方こつちも 浮うかれ出だし、

兎うさぎわ耳みみをば 振ふりながら、

『ピヨイく、ピヨコリ、ピヨイピヨコリ!』

ピヨイく、ピヨコリ、ピヨイピヨコリ!』

十八

小猿こさるわ側そばから 手てを拍うつて、

うまいぞく、兎うさぎさん!

うまいぞく、狸たぬきさん!

囃はやしも躍おどりも うまいもの!

十九

ついでにこいつも 甘うまいぞ。』と、

お月見料理つきみりょうりの ある限かぎり、

栗くりやら芋いもやら 團子だんごやら、

お伽唱歌

二十

手あたり次第に 食べちらし、

お腹がはつたら 肘まくら、

ゴロリと倒れて グウくくく！

けれども兎わ 躍つてる。

狸もまけずに 囃してる。

(8) テレく坊主

一

「明日わうれしい 遠足日。」

天氣がよければ 先生や、

みんなとお山で 花つんで、

一日たのしく 遊ばれる。

二

所が雨めが いちわるな、

昨日もさんぐく に降つといて、

今日またビショく 降つて居る。

これでわ明日も 駄目だろう。

三

兄さんほんとに 何うかして、

お伽唱歌

天氣にする法 無いか知ら?

あるなら教えて おくれな!』と、

お花わ半分 泣いて居る。

四 『あるともく 二人して、

テレく坊主を こしらへて、

あしたの天氣を 頼もうよ。

花ちゃん半紙を 持つといで!』

五 太郎わ半紙を とりよせて、

テレく坊主を こしらえる。

そばにわお花が 臺をおき、

これえと坊主を すわらせる。

六 『テレく坊主! テレ坊主!

あしたわたのしい 遠足日。

雨でわみんなが 困るから、

好いく天氣に しておくれ!

七 お前の力で この雨が、

晴れたらお禮に 甘酒を、

頭の上から ふりかけて、

きれいな川えと 流しましよ。

八 それともやつぱり降るならば、

きたない溝えと 投げ込んで、

上から石をば ぶつけるよ。

お伽唱歌

九

頼めば坊主わ ムクくくと、
いやなら頼みを 聞いとくれ！』

頭をもたげて 云う事にや、

『モシく太郎さん お花さん！

そんなに心配 しなさんな！

十

これから早速 飛んでつて、

寝て居る日輪 呼び起し、

願つて来よう。』と 云う中に、

窓から空えと 舞つて行く。

十一

空にわ日輪 草臥れて、

かさなる雲をば 掛蒲團

ゴロリと倒れて グウくくく！

前後も知らない 高軒。

十二 『さりとわ寝坊な お日様や！

お前がなまけて 居る故に

雨めが勝手に 降り出して、

何時まで立つても 止わせぬ。

十三

せつかく明日わ 遠足と

子供わとうから 楽しんで

居るのにこれでわ 情無い。

あれくみんなが 泣いて居る。』

十四

子供が困ると 聞かされて、

今^{いま}まで寝^ねて居^いた 日^{にち}輪^{りん}わ、
ムクリと頭^{あたま}を あげながら

『よし／＼それでわ 待^まつてろ！』と、

十五

そのまゝ後^{うしろ}を ふり向^むいて、

『こりややい雷^{かみなり} 鳴^なり出^だして、

直^すぐさま雨^{あめ}めを 追^おつばらえ！

ぬかるな 急^{いそ}げ』と云^いう程^{ほど}に、

十六

雷^{かみなり}ゴロ／＼ 鳴^なり出^だして、

雨^{あまぐも}雲^{ぐも}めがけて 追^おいに行く^ゆ。

ところえ加^か勢^{せい}の風^{かぜ}の神^{かみ}、

勢^{いきおい}はげしく 吹^ふき出^だせば、

十七

雨^{あめ}めわ何^ど所^こえか 逃^にげて行く^く。

あとにわ照^てり出^だす 日^{にち}輪^{りん}の

大^おきな眼^め玉^{だま}で 睨^{にら}まれて、

雲^{くも}さえ顔^{かお}をば 出^だしもせず。

十八

テレ／＼坊^{ぼう}主^ずわ これを見^みて、

嬉^{うれ}しやわたしの お役^{やく}目^めも、

ようやくすんだと 一^{いっ}散^{さん}に、

歸^{かえ}れば下^{した}でわ 兄^{きょう}妹^{まい}が、

十九

大^お手^{うて}をひろげて 出^でむかえて、

『ほんとにお前^{まえ}の おかげだ。』と、

お禮^{れい}を云^いうやら、嬉^{うれ}しさに

その手をとらえて 踊るやら。

二十 やくそく通りに 頭から、

甘酒たくさん ふりかけて、

『テルく坊さん 萬歳!』と、

きれいな小川え おし流す。

二十一 この時まつかな 夕やけの

空にわ鳥が 飛びながら、

『カアくあしたわ 上天氣!』

カアくあしたわ 上天氣!』

お伽歌劇附録終

(お伽歌劇)

明治四十五年六月廿日印刷
明治四十五年六月廿日發行

著者 巖谷小波

發行者 大橋新太郎

印刷者 河合辰太郎

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 博文館

振替貯金口座東京二四〇番
販賣部電話本局二六二〇番

不許複製

(定價金四拾五錢)

巖谷小波先生著(創刊)

小波お伽文庫

博文館發行

一卷 ◎お伽太閤記

全一冊洋裝四六
紙數三百餘頁
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

附録▲今太閤幼少物語○お伽詩篇▼

内容

猿の迷兒と光物 錦織左衛門と襪襦城 日出吉の再現、名玉の奇特
光丸誕生と日出吉の正體 腰元桔梗實わ鬼女 妖仙の狼狽、王子の生捕
光丸の放逐と橋上の大鬼 墓前で授かる『天下』の名玉 大面の加勢、天狗の菌狩
鬼の鼻毛と馬の足音 鬼の退散、天狗の推參 妖仙の降參、光吉の天昇

二卷 ◎お伽歌劇

全一冊洋裝四六
紙數三百餘頁
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

附録▲お伽唱歌▼

内容

春 笑ひ山 夏 五光の瀧 秋 白玉野 冬 落葉の宮
上山麓の冬木立 上 峠の争論 上月 宮殿 上 社頭の時雨
下 谷間の春景 下 瀧壺の舞 下 白玉野 下 殿上の木枯

故山田美妙君著

博文館發行

◎お伽刺智恵ぶくろ

全一冊紙數三百七十頁
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

▲四六判彩色口繪一葉及挿畫數葉▼

目次 我儘王 椋太兵衛 虎と人 兎の三ッ口
乞食博士 緋水晶 三人盜賊 猫と鼠

さア、御覽じませ、お伽諷刺智恵ぶくろが出来ました、中からは我儘王も飛出せば、乞食博士も飛出しま
す左様かと思ふと見るからが美しい緋水晶坊ちやん嬢ちやんのお慰みになるは言ふまでもなく、大人方の
お伽にもなり申す。言文一致を初められた山田美妙先生のお伽もの、どんなものか先づ一本を購へ給へ。

河崎醉雨君著

◎小説花子の行衛

全一冊紙數百八十頁
正價金貳拾八錢
郵稅金四錢

▲四六判石版彩色刷口繪挿入▼

花子は春野子爵の秘藏の令嬢也 一日父母に従う 忽然其姿を失ふ不
思議! 不思議! 魔に魅まれしか、猛獸毒蛇の口に罹りしか、忽ち世の疑問となり、茲に
涉し遂に其の行衛を探り得て歸る、作中また 血あ涙あ一物語たる疑はず。
一狂婦人あり躍動神魔の如く、波瀾萬疊實に

巖谷小波君著

◎お伽七草

全一冊四六判特製更紗
表裝美本紙數三三四頁

博文館發行

正金七拾錢
郵税金六錢

春の七草は粗に香りても、それは春ばかりの事でありませぬ。秋の七草は野を飾りてもそれは秋ばかりの事でありませぬ。茲にお伽七草と云ふは、春も香り、夏も匂はしく、秋も盛り、冬も麗はしく、四季を通じ八面に涉つて正に家庭を飾り文壇を彩る真に空前の良書であります。唐土の鳥の渡らぬ先に、はやく來つて摘み給へ、野邊の嵐の吹かぬ間に、はやく來たつて眺めたまへ。

巖谷小波君著

◎むかし

全一冊菊判上製三色判
口繪入紙數二九六頁

正金壹圓拾錢
郵税金拾錢

『東京二六新聞』二十四編を集めたる『新古今のお伽噺』なるものにして、金糸卷、薔薇嬢、煎餅車など可憐にして、無邪氣のなり表装並紙容に善美を盡し、長夜のお伽最も好適の書なり。

現代お伽作家十二名執筆

◎お伽テールブル

全一冊四六判特製彩色
口繪入紙數三二〇頁

正金六拾五錢
郵税金八錢

笑の地獄
燕のマンナ
萬年の花
怪獸實見譚

今金時
助合ひ
お博覽會
家の來

ニコノ太郎
尻毛物語
人魚が島

巖谷小波先生編

◎學校教訓お伽噺

全二冊 西洋部
紙數五百餘頁 口繪三色版
美麗石版數葉每篇木版畫入
正價金壹圓三拾錢送料拾二錢

博文館發行

西洋の部 (既刊)
東洋の部 (近刊)

世界各國の著名なるお伽噺中に就きて短篇の妙味あるもの約三百篇を抜粹して、之を上下二卷に分載したるものを本書とす、學校講話の資、家庭團樂の材として、一日一話を語るも、優に一箇年の量を含む、されば本書一度世に出て群小お伽噺をして顔色なからしむること、恰も太陽出現して星光の消滅するに等しからん、殊に各編共百數十個の密書を挿入して、興味を深からしむる等、あらゆる點に於て、實に理想的好お伽噺集なりと云ふべし、切に大方の家庭及び學校に備へ給はんことを希望す。

少年世界記者木村小舟君著

◎教育お伽噺

全一冊菊判和裝上製
紙數二百九十八頁
彩色石版口繪挿入
定價金四拾五錢
郵税金八錢

次目

○狼と七疋の子山羊 ○紅帽子 ○見鳥 ○ホルレイ夫人 ○ならず者 ○牝鷄と最後 ○蒙と石炭と菜豆の旅行 ○穀物の穂 ○狼と狐との話 ○市街音樂者 ○教の海になつた話 ○星娘 ○漁夫の妻 ○雪媛物語 ○半助の御褒美 ○樺太郎物語 ○狸の王様 ○お姫様と蛙外十話

世界お伽噺完成記念出版

◎お伽花籠

□博文館發行

全一冊紙數三百十頁

正價金七拾五錢

郵税金八錢

▲四六判特製彩色口繪十頁挿入▼

犬の名	(濱山君作)	爪助物語	(佳作君作)	お伽國大王	(琴月君作)
靈の水	(笠峯君作)	錦太郎	(櫻桃君作)	赤天王	(小舟君作)
蝦夷の鍛工	(向陽君作)	金馬銀馬	(湖山君作)		
琴の由來	(斑山君作)	魔法の森	(空々君作)	(以上)	

巖谷小波君渡米記念出版

◎お伽寶船

全一冊紙數三百三十六頁
正價金七拾錢
郵税金八錢

▲四六判上製口繪十五頁挿入▼

お伽寶船來る！お伽寶船來る！七種の珍寶を積んでお伽寶船來る！阜頭に迎ふる千萬の少年少女等は聲を揃へてお伽萬歳を歡呼す！

小波山人歸る！お伽界の偉人小波山人歸る！北米大陸を蹴破して話材山と積み筆硯を新にして小波山人歸る、お伽寶船は着けり。

小波山人は歸れり！小波山人門下の秀才、七人各々苦心の結果、寶船を裝はれたり、波を蹴る鐵輪の響高からずとも、少年諸子が半宵の清興を助くるには餘りあらん、來れ！速かに來りて此の美しき一卷を見よ。

269
424

